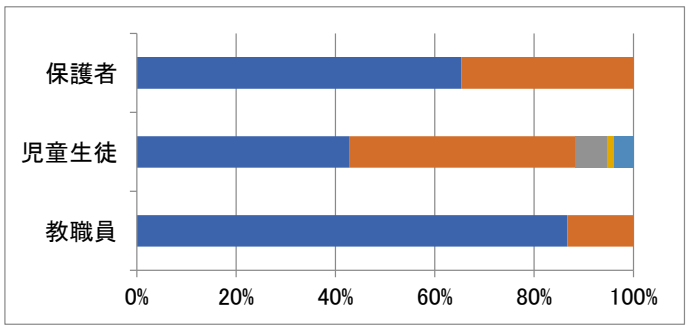
令和７年度　学　校　評　価

そう思う　どちらかといえば、そう思う　どちらかといえば、そう思わない　そう思わない　わからない

（１）主体的に考え行動する力を育む教育の推進

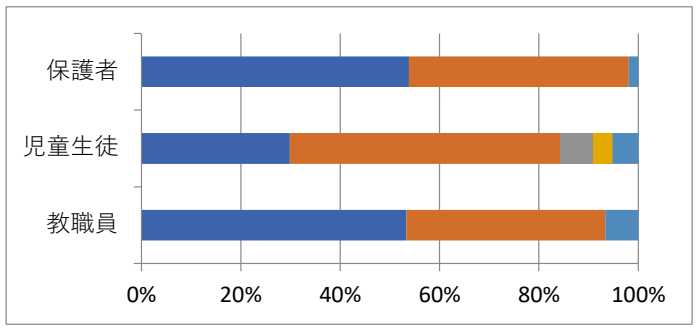
１ 豊かな心と健やかな体を育む教育の推進

学校は、豊かな心と健やかな体を育む教育の充実に努めていると思いますか。（感動・感謝、郷土愛、いのちを大切にする心、こどもの体力向上、基本的な生活習慣など）



２ 自ら学びに向かう力を育む教育の推進

学校は、こどもが自分で考え、自分から取り組む授業づくりに取り組んでいると思いますか。



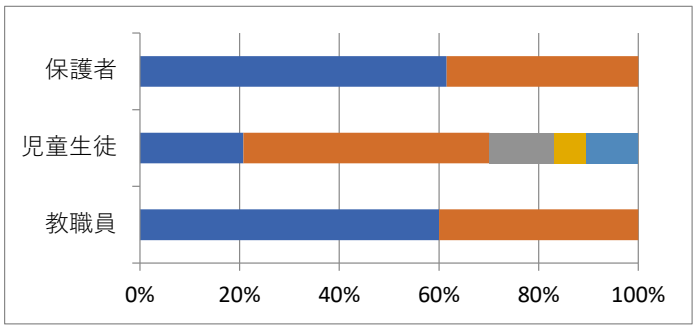
考察

学校教育目標にもある「豊かな心と健やかな体を育む教育の推進」では、保護者100%、児童88%が肯定的評価となり昨年度より向上している。人権教育を核とした教育実践が実っていると思われる。また、「自ら学びに向かう力を育む教育の推進」では、保護者98%、児童84%が肯定的評価であり、特に児童が昨年度より9%向上した。今後も、児童自らが「やってみたい」と思う課題設定及び「次の学びに向かう」振り返りの工夫等による授業づくりを充実していきたい。

（１）主体的に考え行動する力を育む教育の推進

３ 社会の形成や持続的発展に主体的に貢献する力を育む教育の推進

学校は、学校生活や地域社会をよりよくするために考えたり、行動したりするこどもの育成に、取り組んでいると思いますか。（児童会・生徒会活動、学校のきまり見直し、地域のよさを伝えたり課題解決したりする取組、ナイストライ（中学校）など）



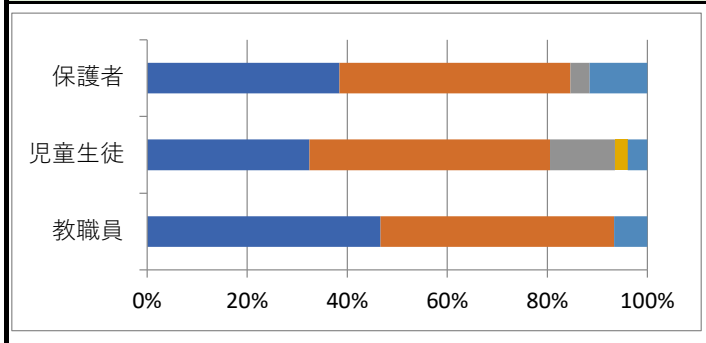
考察

「社会の形成や持続的発展に主体的に貢献する力を育む教育の推進」では、昨年度保護者95%から今年度は100%と高評価となった。また、児童の肯定的評価が昨年度60%から今年度は70%に上昇した。この理由としては、CSモデル校として、地域連携の組織作りから運営に至るまで、子ども、教師、保護者、地域が一体となって考えを出し合い、顔の見える交流ができたことが大きな要因だと考える。また、校則見つめ直し等において、学級会活動や児童会活動を活発に行えたことも要因として大きい。今後さらに、地域・保護者と連携して学校を一緒に運営していくという「開かれた学

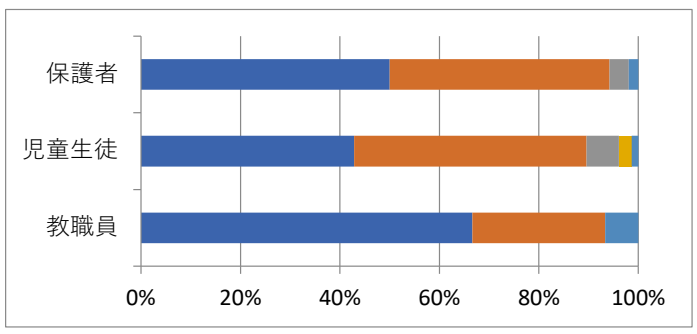
（２）こども一人一人を尊重した教育の推進

４５ 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

学校は、こどもが、学習の方法やペースを自分で選んだり決めたりしながら学ぶ授業づくりを行っていると思いますか。



学校は、こどもが、対話などを通して、他の人の考えや意見を自分の学びに生かすような授業ができていると思いますか。



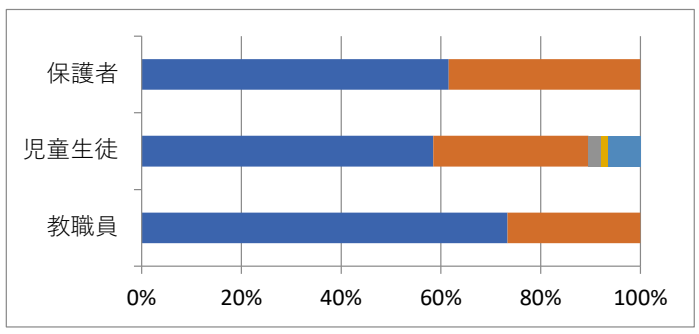
考察

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」について、保護者と児童の肯定的評価いずれも昨年度の評価を上回っており、特に教職員の「そう思う」の割合が30%以上も上昇した。これは、教職員一人一人が「主体的、対話的で深い学び」の実現を目指して、授業改善に取り組んだ成果であると言える。また、児童に対話する力をつけるために、職員自らが対話する場面を設け、主体的に関わったことも要因として挙げられる。今後も児童が主体的に学ぶ場を設定し、個別最適な学びと協働的な学びの一体化を図っていく。

（２）こども一人一人を尊重した教育の推進

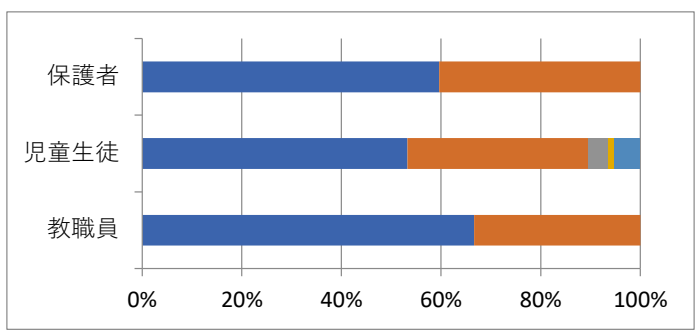
６ 特別支援教育をはじめとする多様な教育的ニーズに対応した支援の充実

学校には、こどもが助けを必要とするときに、先生や友達から支えてもらえる温かな雰囲気があると思いますか。



７ インクルーシブ教育の推進

学校では、こどもがそれぞれの違いを認め、お互いを尊重し合って共に学び合っていると思いますか。



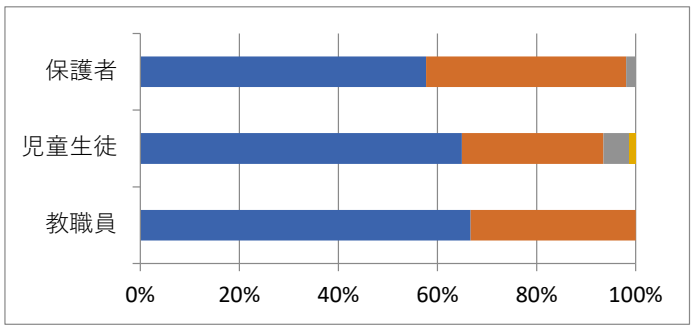
考察

「こども一人一人を尊重した教育の推進」について、保護者、児童の肯定的評価が昨年度よりも上昇しており、何より、教職員の「そう思う」の割合が10%~20%増加している。これは、特別支援教育のOJTやＯｆｆ-JTによって教職員の特別支援教育へのさらなる理解とインクルーシブ教育が推進されたと共に、職員一人一人の専門性が向上したことで、熊本市が掲げる「誰一人取り残さない教育」の実践ができてきている証であると考える。今後も、子ども一人一人を大切にした教育の推進に努めていく。

（3）最適な教育環境の整備

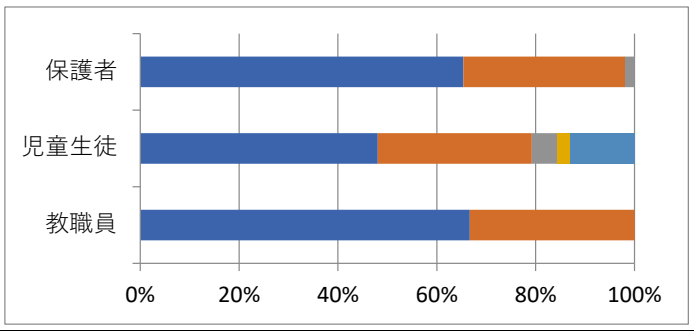
8 安全・安心な園づくりの推進

学校は、こどもの安全を守る環境の整備を進めるとともに、安全教育（生活・交通・防災など）に取り組んでいると思いますか。



9 地域や家庭と連携した教育環境の整備

学校は、地域や家庭の人と協力して、授業や行事などの教育活動を進めていると思いますか。

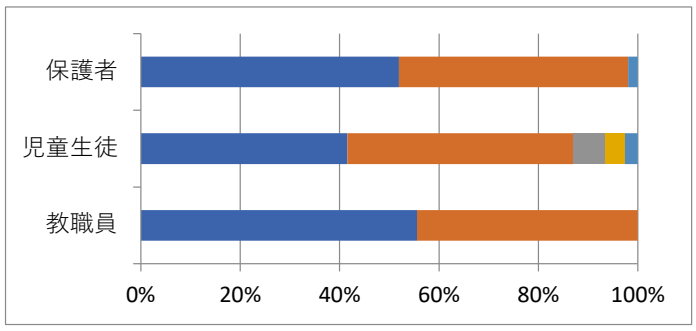


「最適な教育環境の整備」の安全教育については、保護者、児童、保護者ともに「そう思う」の割合が昨年度よりも10%以上上昇している結果から、年間を通しての登下校の安全指導や、避難訓練、安全点検等の取組の成果が表れていると考える。一方、地域や家庭との連携において、児童の肯定的評価が10%程減少している。この結果から、保護者や教職員は連携した取組に一定の効果を実感しているのに対し、20%の児童がもっと連携したい、した方が良いと感じている。今後は、CSモデル校２年目としてさらに実践を積み重ね、保護者や地域との協働的な学びを実感できるような学びの環境を整えていくことが重要だと考える。

（4）こどものいのちと権利の擁護

10 こどもの最善の利益を守る環境づくり

学校は、こどもの意見を反映させ、こどもの権利を守るとともに、こどもや保護者が相談しやすい学校づくりに取り組んでいると思いますか。



「こどもの最善の利益を守る環境づくり」について、児童の肯定的評価が昨年度に比べ20%上昇した。このことから、「校則見つめなおし」において、学級会や児童会の機能を充実させ、児童の意見を反映させる場面を意図的に設定したことで、自己有用感や自己存在感を実感できた児童が増えたことが要因だと考える。また、本校独自のハッピーアンケートの取組や担任による電話連絡や家庭訪問、面談など、いつでも誰にでも相談できる体制が確立していることも大きな要因となっている。一方で児童の10%は「そう思わない」と回答しているため、今後、教育相談のより一層の充実や意見交換の場の設定を進めていく。

来　年　度　の　具　体　的　な　取　組　に　つ　い　て

本年度の学校評価の結果をもとに今後の具体的な取組を考察する。全体的には昨年度に比べほとんどの評価項目で、保護者、児童、教職員の肯定的評価の伸びがうかがえる。これは、昨年度の課題（主に主体性、対話、多様性の3点）を真摯に受け止め、教職員全員が一丸となり、「チーム田底」として共通理解のもとで主体的に取組を進めた成果であると考える。今後は、さらなる取組の充実を求めて、教職員一人一人が主体的に考え、行動できるような教育環境を整えていく考えである。特に、CSモデル校2年目となる来年度は、つくられた組織を効果的に活用できるように、総合的な学習の時間等を通して地域の魅力や課題を見出し、児童自ら「問い」をもち、それらを解決していく探究的な学びの機会を数多く設定する。さらに、その探究的な学びが児童一人一人に浸透し、地域の一員として活動、活躍できるように、校内研修において、教職員自らが対話し、協働することで専門性を高め、児童の伴走者としての役割を果たしていく。

小　中　学　校　関　係　者　評　価

ほとんどの評価項目において、教職員の肯定的評価が昨年度に比べて上昇しているのは、教職員一人一人が児童の成長を信じて、自信をもって指導・支援を行っていることがうかがえる。今後も、その自信をさらに確信に変えられるように日々の自己研鑽に励んでほしい。また、学校で行っている取組やその目的が一部の保護者や地域に浸透していないことも考えられるため、保護者、地域、教職員、児童が取組の目的や目標を共有し、みんなで学校を創っていくために学校はできる限り情報を発信していく必要がある。そして、CSモデル校として、今後も「顔の見える関係づくり」を充実させ、地域に開かれた学校、学校を中心とした地域づくりにみんなで取り組んでいってほしい。